

槐

かい

岡井省二創刊

平成22年3月号

平成二十二年三月、廿九日発行 第一千五百三十一号
平成二十二年九月十八日第一千五百三十二号
毎月、廿一日発行



人の道

高橋将夫

枯野とは風の一息つくところ

枯野には枯野の歌がありにけり

鷹がゐて周りの景は目に入らず

天上に舞ふ鷺己が影持たず

赤蕪を洗ふ湧き水ぬくきかな
裏金も埋蔵金も凍てにけり
風紋は神の指紋よ雁渡し
凸凹の人の道なり霜柱
いく度か恋いく度か冬の雷
冬眠の蛇起こしたる京女
降下する鷹に好機は一度きり

「俳句研究」冬の号三句

槐安集

水野恒彦

修道士冬木のごとく世を隔つ
精霊の森に響けり冬銀河
竜の玉父情のいろと思ひけり
魂魄にかたちありせば冬林檎
闇汁に眠りの浅き詩人かな

延広禎一

ごつごつの子育飴や親鸞忌
隈取は武蔵坊なり青舞鯛
もう一人のわれと出会ひき濁り酒
土佐硯の肌はんなり初時雨
江戸の世のにほひ候藁納豆



加藤みき

大岩に雨滴てんでん淑気かな
縦に横に雪と葉つばが降つてをる
モジリアニの女になれよ福笑ひ
寒晴や身ぬちに響む琵琶のこゑ
鶏を引く狐の大きき髭かな

石脇みはる

凸凹の冬至南瓜の面がまへ
松島の牡蠣船朝日かきわけて
臘月や古備前に挿す松と梅
佛手柑とかたき蕾の梅の山
大年や足腰常と変はらざる

中島陽華

人日や木の葉に七つ穴のあり
空の青寒九の水を海にかな
晴るる日の紅葉の橋のつくも髪
暁闇の餅花揺れて高野かな
冬満月牛王宝印ふところに

栗栖恵通子

龍穴に青き水ある初日かな
杖捨てし夫に従ふ大旦
炭籠の編手ゆるんでをりにける
艮に冬の波来る赤絵皿
唇の皮うすきこと寒に入る

竹内悦子

古備前の大壺ありき石路の花
出雲より神の戻りし広間かな
枯木灘鏡の中の石榴の実
冬の霧神武の里を包みける
陀羅尼助ころがる紫式部かな

大島翠木

磔像やメタセコイヤの枯
雪女溶けてラストー彩の壺
兵俑や青首大根前にならえ
塔内を貫く柱朴散華
雪ばんばあのかちびるの有や無やな

雨村敏子

元朝の水音につづく火の匂ひ
土佐硯の楯円の凹み去年今年
御家墨は松の模様の二日かな
獅子柚子の窪み窪みに日の溜まる
斧振るふ楯に木霊のありにけり

本多俊子

天目に小春の雲の流れけり
冬すみれふみの余白にあるこころ
父の国霜夜の音の遠くより
落葉つけるかと遊びて老いけらし
風の音水の音年深むかな

久津見風牛

雪吊りのあやつり人形動き出す
考へてゐる間も椿落ち止まらず
囲炉裏火に芭蕉解体論はじく
凍蝶の放下の姿美しく
大根引き天動説にこだはりぬ

近藤きくえ

ひと文字の書体に気迫年新た
大袈裟にほめられてゐるおでんかな
マスクして目で分かり合ふ仲なりし
魴鮓の良きこゑをもて吾を呼ぶ
椋の木の力瘤なり寒に入る

近藤喜子

君に詩を冬の林檎に青空を
純真な愛は手ぶらや藪柑子
水の輪に大白鳥の鼓動かな
少年を待ち続けぬる冬の蝶
星ふたつ氷柱の中に光り合ふ

瀬川公馨

寒の月金波と白紙委任状
ケ・セラ・セラ直面で入る師走かな
山住みの火口ありけり去年今年
歴々のラピスラズリや龍の玉
大年の願人坊主の疇かな

谷村幸子

はこべらの初々しきは抜かずおく
のぞかれて葉牡丹のなほ艶めけり
母の背を流してみたき柚子湯かな
飛びつぷりのまことゆつたりゆり
色あせし譜面つくろふ霜夜かな



槐市集

松原仲子

こんなにも強き光や十二月
寒雀神の顔して松の枝
年越や大地の音色掃き寄せて
そのこゑに心をひらく雪女
着ぶくれて夕日の中を跳ねてみる

松本桂子

冬満月どんろど橋の上ををる
奥山に日向のうごく冬至梅
白菜の結球のして透し網
耳穴に冷たき小指冬至来る
焼板やいたにピン押ししてありけり冬構

柳川 晋

音程は人それぞれの聖歌かな
楳火燃ゆあれ山姥の夕餉かな
片時雨抜けて迷ひの森に入る
底冷や白河夜船にて参る
お多福の背せたら撓負ひたる大熊手

山根征子

おのが道おのが見つけし野老掘
天平の満月出でし十二月
山眠るわが瞑想いま半ば
深吉野に錠の音あり冬に入る
寒の水渦となりみて米を研ぐ



槐集

高橋将夫選

坐つたらハイと出てくる関東煮くわんしゅじ

守口 柳川 晋

種子しゅじほこつと湯気となりける大根焚

種子リ仏・菩薩を標示する梵字

比翼塚夢の泥鰯は掘られけり

右向いて左日本の十二月

去年の粒今年の粒と砂時計

じわじわと雲湧く日なり冬苺

枚方 中野 京子

裸木の風をこばまず根をはりし

暮るるまで冬満月のかるさかな

風呂吹きふうりょの黄金のたれの天が下

恙無し人參大根湯気とうきの卓

蒼天に色鳥いろを失なはず

大阪 久保東海司

雁の列墨濃淡の山水画

出棺に釘打つわかれ雁の列

雪催托鉢列を乱さざる

襟巻きの隙間に入りし風の刃ぞ

冬滝に一筋の芯ありにけり 枚方 富松 寛子

放念の身のふんわりと雪蛭

一切の蟠りなき冬木かな

偕老同穴あつあつの卯酒

人參のジュース朱色の余命かな

木枯やイエスタデーをもう一度 京都 竹中 一花

アポロンの詞読みをり楯明り

病棟の灯の赤あかと春を待つ

水面に冬日さざめく浪華かな

あら玉の光をくぐり帰りませ

赤道を越え来し冬至南瓜かな 守口 岩下 芳子

大年の赤き夕暮黒き富士

寒鴉の肩の辺りが人に似し

雪虫の舞ふ上になり下になり

石路一茎挿して明るき東司かな

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

木枯やイエスタデイをもう一度 竹中 一花
木枯の吹く寒い日はビートルズのイエスタデイを聞きたくな
るといふ。よほど懐かしい想い出があるのだろうか。そういえば、
昨日はいい日だった。過ぎ去ったものはいつても美しい。

種子ほこつと湯気となりける大根焚 柳川 晋

種子とは仏・菩薩を標示する梵字と注書きがある。ありがたい
仏の梵字が大根を焚く湯気に消えたという。「ほこつと湯気にな
った」ところに、仏のぬくもりと濁世での救いを感じた。ちな
みに、京都鳴滝の了徳寺と京都千本釈迦堂（大報恩寺）の大
根焚が有名で、鳴滝の大根焚は季語になっている。なお、千本
釈迦堂の大根焚では、大根を縦半分につけて、切り口に釈迦の
梵字を書いて魔除けとし、その後、他の大根と混ぜて参詣者に
食べさせている。

大年の赤き夕暮黒き富士 岩下 芳子
夕焼けの空の真下には黒い山並みがある。富士の夕焼けもまた
同じである。晩夏から初秋の早朝に多く見られる赤富士は有名
だが、黒富士が詠まれることはない。しかし、黒富士もまた富
士のたしかな姿なのだ。

霜柱ふみてうつつの寂光土 西村 純太
生滅変化を超えた永遠の浄土は霜柱を踏んでこそ現実に到達で
きるのかもしれない。

暮るるまで冬満月のかろさかな 中野 京子

冬の昼の月、しかも満月ということで、作者は大いに感動した
であろう。そして、夜中の月より昼の月を軽いとみた作者の感
性に私は感動させられた。たしかに、金色の満月より雪のよう
な昼の月は軽そうだ。納得。

海中に魂を吐きたりせいこ蟹 中田 禎子

せいこ蟹は雌の蟹。雄のずわい蟹に比べて小さく、粒粒の卵と
赤い子を持つている。「海中に魂を吐く」は作者ならではの視点。

人類の一步の証月冴ゆる 前田美恵子
人類が月に足跡を残してもどれくらいになるのか。今は地球
の出を見る時代になった。

蒼天に色鳥いろを失なはず 久保東海司
秋には色とりどりの小鳥が渡ってくる。青空を背景にそれぞれ
が色彩を競いあっているようだ。

愛されし夢より醒めて霜夜かな 岩月優美子
夢と現実とのギャップ。でも、まだそんな夢をみられるなんて、
うらやましくもある。(以下略)